

退任



退任にあたって

医歯学系教授（医学部保健学科）
小林 悌二

ただ静まり返って黒板を写すだけの妙な空気が段々と質問が出るように変わり、嬉しい経験になりました。

2年前、東北大学定年と同時に、思いもかけず引き続き教育研究の機会を与えていただき、仕事を継続し乍ら故郷で教育に参加できる喜びで放射線技術科学専攻に着任、45年ぶりに故里の住民になりました。そして再定年です。

授業では放射線物理学と教養の物理学を担当。大学を代わることは大変新鮮な気持ちになるものです。以前から、毎年同じやり方の講義はしない、と決めて（さて出来るか？）、工夫に努めてきたのですが、環境変化の新鮮さに助けられ学生さんの反応に教えられ、何とか続けることができました。

最近の傾向ですが、物理の広い基本を必須とし、数学も広く使う分野に来る学生でも、これらに余り接して来

ない者が少なくない数でいます。足並み揃えには時間と工夫を要します。本来通して学んで相互に効果のある科目内の各内容分野が改革で個別科目に分立し選択科目化された結果、所定単位数を満たす最少限の選択をし、他はもう選択しない傾向が出ています。選択幅を広くし関心・必要に応じた自分に適合の授講組立てが出来るようにとの改革が最少限選択組をも増やしました。

「物理は苦手」ときっぱり宣言する学生さんと話しますと、これ迄の経験が「計算ばかりだった」「公式の暗記だった」が多く、物の理りを探る魅力は経験してません。そこで持論の「物理には暗記するものは何んにもないよ。理解することだけなんだよ」と一寸極端な言い方をし、「暗記型で勉強せず、理解型で勉強すればこんなに面白いものはないよ」「質問でうるさい授業大歓迎」とも促していましたら、最初ただ静まり返って黒板を写すだけという妙な空気が段々と質問が出るように変わり、嬉しい経験になりました。

始まった大学大変化を、中にいて見ることは出来ませんが、この2年間楽しく教育研究をさせていただきました大学、お世話になった皆様、ありがとうございました。



春山の空気を吸って一休み



退任に際して

人文社会・教育科学系教授（経済学部）
青山 功

経済学部籍を置き教育・研究に微力を尽くせたことはなんともいっても幸せでした。

昭和41年の赴任だから、もう40年ちかく前のことになる。経済学部が人文学部の経済学科として組織替えし

て定員増となったその初年度の採用であった。それまで7名であった定員が倍増し、経済学専攻の先生方の意気は高まっていた。そのような時期の赴任である。経済学部は、その後現在の姿にまで発展整備されるが、その一部始終を間近で見聞きすることになった。

それもあってか、大学の五〇年史の編纂にあたっては「経済学部」を担当した。二十五年史を継ぐものであるが、その年史は斎藤悟郎先生が担当されたので、先生の収集された大学発足当時から法文学部時代までの資料を引き継いだ。資料は、その時期の状況を彷彿とさせる会議のメモ、書簡類、二十五年史の草稿や感想等である。五〇年史のため資料を読み進めたが、大学発足前後の事情や経済学科への組織替えへの経過などは（執筆者の斎藤悟郎先生が学科主任という責任者であったため）筆に力がこもり、熱気があふれていた。気迫と熱意に満ちた先生の姿勢をみるおもいである。

ぜひ、経済学部草創期の先生方の熱気とともに、経済学部の前史を読み解く資料として保存してもらいたいものである。

大学広報への寄稿文として、退任に際しての文をと題を与えられて考えを巡らしているとどうしても想いは昔に遡り、思い出話になってしまいます。思えば、経済学科から経済学部へという活気に満ちた時期に、経済学部に籍を置き教育・研究に微力を尽くせたことはなんといっても幸せでした。心からの感謝の言葉を添えてキャンパスを去りたいと思います。



新潟大学を退任するにあたっての思い

自然科学系教授（工学部）
石井 郁夫

知識を教えることよりも学生一人一人に将来の理想や希望を形成するためのアドバイスを与えることが大切であると感じています。

設立されて間もない工学部電子工学科に1964年に赴任してから41年になります。1977年に情報工学科が設立されて移動、そして1995年からは大学院自然科学研究科に勤務しました。この間、コンピュータのハードウェア領域の教育を担当しながら、画像による空間認識に興味を持ち、3次元画像計測や人工現実感の研究を行ってまいりました。人工現実感技術は様々な分野での応用が期待され、夢が語られていますが、人間の空間認知能力が高く、まだ満足できる現実感が得られないのが現状です。幸い若い人たちの関心が高く、遠からず実用的な技術が開花すると思いますので、若い研究者、技術者の挑戦を期待します。

長い間ハードウェア教育を担当して感じることは、現在のコンピュータが性能の追求によって高度化が進み、入門者にとってきわめて敷居の高い存在になってしまったことです。自分は幸いLSIコンピュータの黎明期以前のきわめてベーシックなコンピュータからその発展と共に歩んできたために、コンピュータを恐れることなく楽しく付き合うことができました。コンピュータハードウェアのブラックボックス化は情報技術者の思考の幅を狭めますので、ベーシックな部分からはじめて、常に疑問と興味を持ってハードウェアとも付き合っていたきたいと思います。

私は常に若い学生からエネルギーを貰って過ごしてき

ました。クラブ活動の顧問や学友会の文化本部長も務めさせていただきました。クラブ活動では自主性と目的を持って活動しているために学生が生き生きしています。その経験から、知識を教えることよりも学生一人一人に将来の理想や希望を形成するためのアドバイスを与えることが大切であると感じていますので、若い先生方はぜひ実践してください。

在勤中ご指導、ご支援を賜りました教職員の皆様に感謝申し上げますとともに、新潟大学のますますのご発展を祈念します。



母校での43年間

自然科学系教授（農学部）
早川 嘉一

大学の将来、教育のこと、研究について熱く語り明かしたことが昨日のことに感じられます。

1962年（昭和37年）の春、卒業と同時に農学部の助手に採用されて以来母校の教員として43年間無事に勤めることができました。恩師の先生方の温かいご指導、諸先生方の労を厭わないご支援、事務の方々のご協力そして学生さんの若いパワーとエネルギーを頂きここまで歩んでこれました。心より感謝とお礼を申し上げます。

農学部は五十嵐キャンパスに統合移転する1974年までは新潟市西北部の小金町にあり、松林とアカシア並木に囲まれた木造校舎で研究施設等はまだまだ質素でしたが、アカデミックなキャンパスで大学の将来、教育のこと、研究について熱く語り明かしたことが昨日のことに感じられます。

五十嵐キャンパスへの統合移転がなされてからは総合大

学として充実発展してきました。今、中庭に舞う春雪を研究室の窓から眺めながら昨年県内を襲った7.13豪雨災害、中越地震災害の調査資料を整理しているところです。

顧みると、災害研究へ進むきっかけは教員として歩み出した年の松之山大地すべり災害（1962年）、その2年後の新潟地震災害（1964年）、更に3年後の羽越豪雨災害（1967年）の調査でつぶさにその痛ましい惨状を経験したことによって、そのメカニズムの解明と災害対策の確立めざして取り組んできました。以後の妙高土石流（1978年）や県北地震（1992年）等の数々の災害研究調査に関わりながらも、今回の水害と地震の悲惨な爪痕を目にしたとき、この43年間やってきたことは何だったのか自分の限界と自然のエネルギーの大きさを改めて感じているところです。自然の営みを謙虚に見つめ直し“若き夢”の実現に一步でも近づけるよう再度チャレンジして行きたいと思っております。

この度、新潟大学として学際的な新潟大学中越地震調査団を立ち上げ、調査研究が進められていることは災害科学の発展と地域社会への貢献に多大なものがあると期待を致します。新潟大学のさらなる飛躍を祈念しペンを置きます。長い間有り難うございました。



現地調査にて（本人前列右）



みなさんへ

人文社会・教育科学系教授（人文学部）
佐藤 信行

長く教員生活を送ることができましたことを心から感謝いたします。

今日まで長く教員生活を送ることができましたことを心から感謝いたします。

新潟地震の翌々に初めての地で、ドイツ語教師の道をスタートしました。大学ごとの個別の問題がどうあれ、学部自治会の枠を越え、全学共闘会議（全共闘）へと高まっていった日本の学生運動、一方でまた全世界的なスチューデント・パワーの嵐を目の当たりにして、大きな衝撃を受けました。ドイツ語を教えること、教師と学生の関係、制度としての大学など、それまで自明であったあらゆることについて、根底から考え直さなければなりません。それは相当に困難な試行錯誤の連続でした。

80年代半ばのペレストロイカとグラスノスチを源とする大きな流れは、ベルリンの壁を崩壊させ、ドイツの統一をもたらし、極東の大学にまで波及し、ドイツ語教育の基盤であった部局・教養部を解体させました。この間の大学に関する多くの出来事は、その延長線上にあるといっても過言ではありません。外国語教育の一変、学部における新たな演習や講義の担当、従来とは異なる方法で文学や映画を考えることなど、押し寄せる課題は身に余るものでした。ドイツ映画『BOOD BYE, LENIN!』の好青年アレックスにはほど遠く、老いたファウスト博士のようにメフィストの魔力による若返りもできませんが、一書生として、勉強を続けていきたいと思えます。

最後に、みなさんのご健闘をお祈りいたします。

退休に際して

人文社会・教育科学系教授（教育人間科学部）
清田 文武



青島大学最初の中外学者跨文化学術研討会（2003年9月24日、参加者同大教授陣）で講師を務める。撮影は同大（現華中師大）李俄憲教授。

新潟・長岡・高田の3地区に分かれていた学部の懸案の統合、続く大学院の設置には思い出も多い。

学生時代を含めると旭町で14年余、五十嵐に移ってからを合わせ、本学には37年余お世話になった。学生の時の机の上には雪が降り積もったりするほどのボロ校舎であって、現在からすると隔世の感がある。しかし、その後本学はめざましい発展を遂げて今日に至っているが、この間、全学の教職員からご指導・ご支援をいただき、学生諸氏にも恵まれ、同窓生からも恩顧をこうむった。心より御礼を申し上げたい。

特に、新潟・長岡・高田の3地区に分かれていた学部の懸案の統合、続く大学院の設置には思い出も多く、また平成4年度の放送公開講座（放送はBSNのラジオ）は、テキスト作り、放送、スクーリング等今も鮮やかに脳裏に蘇る。

退任

平成10年からの4年間は教育学部からの名称変更を伴った教育人間科学部附属新潟小学校に併任となり、ここでも思い出は少なくない。「砂山」で新潟の子供たちにゆかりの深い北原白秋の高足、宮柊二作詞にかかる校歌の語を織り込み、卒業式には、

旅立ちのときわが丘や春の虹
と詠んで、はなむけの言葉に添えたのであった。退休に際し、一句の句意とともにゲーテ作『ファウスト』の最後の場面を思うことである。

本学に弥栄のあらんことを。



感謝の言葉

人文社会・教育科学系教授（教育人間科学部）
田中 弘子

附属校園に足を運ぶたびに子どもたちの成長ぶりを確かめることができ、貴重な経験をさせていただきました。

新潟大学には、1974年から31年間お世話になりました。五十嵐キャンパスへの統合移転に始まり、大学院の創設、教養部の解体、(財)日本臨床心理士認定協会による指定大学院の開設、また国立大学法人化に伴う組織改編など、その都度大きな課題と取り組みつつ、時にはあえぎながらまた耐えしのびながら、一所懸命に教育と研究に頑張ってきたというのが実感です。その間、実に多くの方々に出会い、支えられ、大変お世話になりました。この場をお借りして、心より御礼を申し上げます。

多くが既に卒業して、教育や臨床心理学の専門家として、また、公務員や福祉をはじめ多くの分野で活躍している学生との出会いからは、若さと元気をいただきました。

1988年から足かけ12年の間の8年間は、附属幼稚園の園長として、長岡キャンパスに通いました。これは、3歳児として受け入れた子どもたちが中学校を卒業するまでの期間に当たるため、附属校園に足を運ぶたびにその成長ぶりを確かめることができ、貴重な経験をさせていただきました。

また、学生時代以来のライフワークとなった生きがい研究の一部が実存心理検査としてささやかながら結実し、医療や福祉、また教育や研究の分野で広く活用されるようになったことはあり難いことです。

お世話になった同僚の先生方には、法人化に伴う生みの苦しみが将来の大きな実りにつながることを祈り、また、学生のみなさまには、ひとりひとりの夢を大切にされ、それを大きく育ててゆかれますように祈ります。

